

第13回

卒業論文の校正という仕事

The task of proofreading graduation theses



吉永美香（名城大学 理工学部 建築学科教授）

2月も中旬になり、やっと卒修論の指導が完了した。学生の論文チェックというのは、外から見るとよりも悩ましい作業だ。同僚の中には「研究というものには学生が主体性をもって取り組むべきものだから、論文も本人の責任で書けばよい。大きな間違いがあれば指摘するが、基本的には出てきたものを受け取る。」と達観した先生もおられるが、私には到底真似できない。せっかく一生懸命に頑張ったのだから、周りに理解してもらえる形で記録しなくてはもったいない。それに何より、チェックをしている私自身が気持ち悪い。主語と述語が対応していないよ、これは前提条件だから結果ではなくて前の章だよ、用語は統一しないと違う分析に聞こえるよ、という具合で、読み進めれば読み進めるほど、気になる点が積みあがっていく。

私は通常、学生から送ってもらった Word ファイルに「変更履歴の記録」機能で指摘を入れるのだが、これが曲者で、前後を入れ替えただけなのに、大半が真っ赤になって、ごそっと書き直されたように見えてしまう。いやいや、学生は学生なりに頭を捻って一生懸命に書いたのだから、できるだけ元の文章を残してあげなくては。一文節でも、一文字でも黒い状態を維持できるよう、消した字を戻したり、また消したりと気を遣う。時間に余裕があるときには、なぜ元の文章がいけないかを「コメント」機能で説明してあげる。が、あまりに同じミスが登場すると、イライラが溜まりすぎる前に、一旦送り返す。こちらとしては、指摘を理解した上で、まだチェックしていない後ろの文章を改善して再提出してほしいのだが、再提出された原稿にはまた同じミスが…。10数人を相手にこの作業をひたすら続けるのが、年度末の私の大きなタスクだ。

昨夏に某大手企業に勤める30代のOBが遊びに来てくれた際、4年生たちに「心折れるよねー。でも社会に出たら役立つから頑張るって。」と言ってくれた。喜んだのもつかの間、「吉永先生より細かい人には出会わないから。」あ、そう…。また別の大手企業に勤める30代のOBは、「研究内容よりも論

文指導の方が社会で役立つ」とのこと。もはや喜んでいいのか悲しんでいいのか分からない。彼曰く、社会に出ると書類のダメだしはされても、上司がお手本を書いてくれることはないで、本当に書けないと一つの書類に延々と時間を費やす羽目になる、とのこと。なるほど、私には民間企業での就労経験がないのでよく分からないが、優秀な社員ばかりの職場なら確かにそういうものかもしれない。でも、今の卒論生たちが社会に出て活躍するころにはAIがすべて書いてくれるだろう。やっぱり私のこだわりはそろそろ終わりにしたほうがよいのかも知れない。

そもそも正しい言葉というものが、時代の流れに合わせて移り変わるものだ。「…させていただく」という過剰な敬語表現が登場したのは10年以上前だったのだろうか。私は日常この表現を使うことはないものの、今ではあまりに社会に浸透してしまったので、メッセージを受け取る側がこれを使わないと丁寧さを感じてくれないのではないかと不安になるときに限り、渋々使っている。「関係性」という表現はもっと最近になって登場したと思うが、私の周りの若い先生や学生は正しい「関係」よりも、むしろ「関係性」を好んで使っている。想像だが、両変数間に関係があるかどうかは確認していないけど、たぶんあると思うから、あることにして話を進める、というオブラート作戦なのではなかろうか。論文なんだから正確じゃない前提で無理に話を続けないでよ…と眉をひそめているのは、多分私だけだ。

さて、卒修論が終わって新年度に入るまでのわずかな期間が、待ちに待った自分の研究の時間だ。これから私は英校正から戻ってきた投稿論文原稿の修正に入る。英語の論文となると、私はまさに学生たちと同じ状況だ。「編集履歴の記録」で真っ赤になり、「コメント」がたくさん添えられた20ページを超えるファイルは、お金を払っているとはいえ、ありがたいとしか言いようがない。単純なもので、学生たちがありがたく思っていなくても、社会であまり役に立たなくても、もう2、3年は続けようかなという気になってきた。